The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	カリフォルニア大学オナー・プログラム調査旅行
Author(s)	荻原, 哲; 熊野, 岳
Citation	大阪大学大学教育実践センター紀要. 2009, 5, p. 25-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6784
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『大阪大学大学教育実践センター紀要』第５号（2008），pp.25－32

【調査報告】

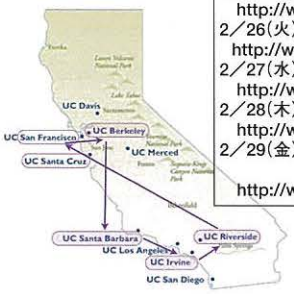
カリフォルニア大学オナー・プログラム調査旅行

荻原　哲・熊野　岳

Fact-Finding Site-Visit at Universities of California "Honors Program"

Satoshi OGIHARA and Gaku KUMANO

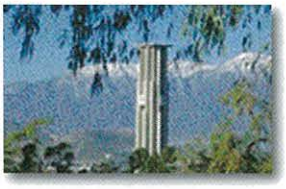
We visited four campuses of the University of California to know the details of honors programs being run by individual campuses. Our fact-finding visit included the following mandates: first, meeting with the program coordinators and teachers; second, collecting information/files/documents relevant to honors program at each campus; third, interviewing honor students, and finally class observation of the programs. We spend half-day to whole day on each campus and hereby we report the summaries of our fact-finding site-visit. While we were on the trip trying to see more people and collect more information relevant to honors program, we at the same time started having an understanding that, besides the details of the programs now running, it would be more meaningful and significant to know the history of the programs in the social context, and how the quality of the programs is maintained organizationally. Our most important discovery is that the high spirit of the faculty members, coordinators and administrative officers is the driving force for honors program at University of California. We do not think it totally possible to "import" honors program from California. It would rather be our mission to "create" Japanese-adaptation of honors program that fully incorporates the social background of Japan.



2／25(月) カリフォルニア大学バークレイ校
http://www.berkeley.edu/
2／26(火) カリフォルニア大学サンタバーバラ校
http://www.ucsb.edu/
2／27(水) カリフォルニア大学アーバイン校
http://www.uci.edu/
2／28(木) カリフォルニア大学リバーサイド校
http://www.ucr.edu/
2／29(金) 大阪大学サンフランシスコ
教育研究センター
http://www.osaka-u-sf.org/

UCSB

UCB


UCR

UCI

なぜオナープログラムが必要なのか？

SF-Center OU

なぜオナープログラムがカリフォルニア大学にとって必要であったのかを知ることは，大阪大学理学部がいまオナープログラムを立ち上げようとしている時にもっとも優先度の高い調査項目であった。実績をもつカリフォルニア大学のオナープログラムの歴史的背景，社会的背景を知ることで，理学部のオナープログラムがただ単にアメリカモデルを「輸入」したものでなく，日本において十分な意味のある教育プログラムになる可能性が得られると考えた。二つの歴史的・社会的要因が浮かび上がってきた。

- 大学の大衆化
- 大学の研究指向の強化

カリフォルニア大学のオナープログラムはキャンパス

によってプログラムの内容，創設も40年から20年前とまちまちであるが，いずれの場合も上に上げたような，第二次大戦後の先進国で起こった出来事を発端としている。大学の大衆化によって非常に多くの若者がカリフォルニア大学に押し掛けた。その結果，マスプロ教育が巨大な講義室で行われ，一方的に教員から知識を伝達される形式のカリキュラムが通常の形態となった。学部学生にはほとんど研究経験が与えられない。同時並行的に研究大学としてのカリフォルニア大学はその指向を強化し，世界中の研究大学との熾烈な競争に巻き込まれ，多くの研究業績を教員が求められることとなった。その結果，学部教育の空洞化の恐れが見え始めた。教員たちは学部教育に関心を失いがちであったからである。

このような状況の中でオナープログラムが誕生した。マスプロ教育への学生たちの批判，意識ある教員たちがマスプロ教育のなかでは真に創造性を持った人材育成が出来るのだろうかという懐疑心，学力底辺部の学生に照準を合わせた授業で良いだろうかという懐疑心が誕生を後押しした。1960年代の学生運動が契機になっているプログラムもある。

カリフォルニア大学オナープログラムの実態（1）

オナープログラムの概要を紹介しよう。オナー学生は成績によって選ばれる。大学によってことなるがトップ5％から10％の学生をGPA値で3.2~3.5で選別する。教員数の確保，予算が制限要因となるためにプログラムに参加できる学生数に上限をもうける必要がある。そのためのGPA値であるが，それにしても3.5（UCバークレー校，Environmental Sciencesの例）は非常に高い。しかもこの値を常にキープしていないとオナープログラムにとどまり続けることが出来ないため，オナープログラム以外の授業をおろそかにすることはできない。オナープログラムはあくまでも通常のカリキュラムに付加されたものであり，中途半端な努力ではやり遂げることはできないのである。オナープログラムのカリキュラムは次の三つのスキル・経験を重視する。

バークレー校Mulford HallのStudent Affairs Officeにて。左より、熊野、Welter教授（Executive/Associate Dean）、荻原、Johnson氏（Assistant Dean）、Kishi氏（Program manager）。バークレー校では、キャンパスレベルでのオナーズプログラムはなく、学部レベルにとどまる。Enviromental Sciences学部にお邪魔した。

- Writing Skill　書く能力
- Presentation Skill　自分の考えをまとめて，人に伝える能力
- Research Experience　研究体験

こういったプログラムを開始する時期はキャンパスによって異なるが整理すると次のようになる。

- 一年生から開始（学生は高校の成績で選別される）
- 三年生から開始（一年生からのプログラムと連続するケースもある）
- 四年生のみ（卒業研究；実験）

オナープログラムは少数の優秀な学生を対象にしたものであるが，カリキュラム面ではキャンパスによって様々な工夫が見られた。オナープログラム用に特別な講義を準備する場合と，そうでなく通常の講義に出席したオナー学生に特別な宿題，課題，教員とのコンタクトアワーを設ける場合の二例が見られた。一年生から開始するものとしては，discussion sessionと呼ばれるものに参加が認められる。これは，講義後に教員を交えた少人数制のsessionで，講義の内容等をより深く議論する場である。講義は普通，学生TAによって進められるので，教員と直接話しができる機会は大変貴重なものである。三年生あるいは四年生から開始するものとしては，次のような学習意欲をかき立てるようなプログラムが準備される。

- Project Proposal & Research　個別性の高いプログラムを教員の指導のもとに行う
- Research Seminar　オナー学生が研究成果を発表するセミナー
- Publication　研究成果を学術論文として公表する

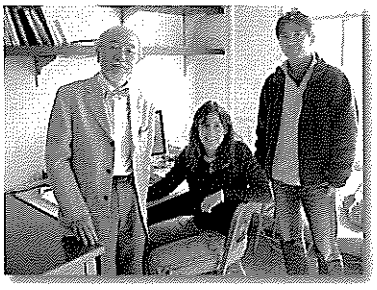
研究提案はまず自ら作成し，自ら適切な指導教員を選び教員室のドアをノックするところから始まる。教員に対してプロジェクトの説明，議論を行い，受け入れられなければ次の可能性に挑戦する。オナー研究には奨学金をキャンパスが用意することもあるし，NSFがサポートする場合もある。こういった一連のチャレンジをオナープログラムのスタッフが黒子となって学生を励まし，時には研究提案の書き方，教員への説明の仕方，次の可能

性の探り方等のアドバイスをしながら支援する。研究成果の発表会には両親，出身高校・近隣の高校の生徒，ほかのオナー学生が招待される。研究成果は場合によっては学術雑誌に公表されるので，オナー学生はそれを目指して非常に努力することになる。このようにカリフォルニア大学のオナープログラムは少数の優秀な学生を選別して高度な授業を行うものではなく，むしろ注目すべきはオナー学生にいかに意欲を持たせるのかというメカニズムである。UCリバーサイド校ではオナープログラムに「優秀な学生にアイビー・リーグ体験を」というキャッチフレーズを用いて，学生の意欲を引き出そうとしていた。

カリフォルニア大学オナープログラムの実態（2）

ここでオナープログラムそのものではないが，オナープログラムと高度な類似性を持つ二つのユニークなプログラムの例を紹介しよう。

- CCS（College of Creative Studies）サンタバーバラ校にある「創造的」カレッジ
- Senior Research Seminar　バークレイ校Environmental Sciencesで四年生対象の科学論文執筆およびプレゼンテーション法コース



バークレー校Mulford HallのShelly Cole教授の部屋にて。左より、荻原、Cole講師（Enviromental Sciences学部のSenior Research Seminarの講師）、熊野。Cole教授はオナーズプログラム専任で、リサーチプロポーザルの書き方、実験のデザイン、結果の解釈、プレゼンテーションの仕方等の講義および実践の指導にあたる。

UCSB-CCSは非常にユニークな存在である。UCサンタバーバラ校内に極めて少人数制のLiberal Artsのカレッジを内包したものである。1960年代の学生運動を契機に設立された。Creativityとは何なのかという学生たちとの真摯な討論から誕生したと，現在担当教員をしているFoltz准教授（写真参照）から聞いた。CCSが標榜しているのはconsumer of knowledge知の消費者でなく，producer of knowledge知の創造者を育てるということである。自分の専門以外のCCSコースを取るようなダブルメジャーを積極的に推進しており，例えば，音楽学部の学生がCCS Biologyをとっている例などがある。卒業生の80%が大学院へ進学する。瞠目すべきはCCSには専任事務職員が3名配置されているが，専任の教員はいない。すべてUCサンタバーバラ校の教員が無給でCCSで教育活動を行う。

UCバークレイ校のCole講師（写真参照）が開講している「Senior Research Seminar」のユニークさは何よりも卒業研究との高い連動性にある。UCB Environmental Sciencesではすべての学生が卒業研究を四年生後期に行う。Cole講師のクラスは四年生前期から始まり，一年間週一回，計30回続く。前期では，身の回りにある研究対象となりうるような問題・疑問点の見つけ方から始まり，その問題・疑問点を解決するための実験方法のデザインの仕方，情報の集め方，結果の解釈の仕方，論文としての執筆方法，口頭発表の仕方を講義形式で指導する。後期では，前期で培った知識を生かし，実際に研究を行い，その中で得られたデータを表現する方法を指導する。学生たちは，自分自身で見つけ出したテーマをもとに，自分自身で実験し，得られたデータを文章表現および口頭表現するチャンスを与えられるため，強く学習意欲を高められることが想像に難くない。Cole講師は常に学生のアドバイザーとして相談にのっていることは言うまでもない。

オナープログラムのキーコンセプト

オナープログラムのキーコンセプトはなんであろう？学生にとってのメリットとは？答えは非常に明確で二つある。

- Individuality
  教員との個別性の高い接触
- Research Experiences
  研究経験

上述のように巨大研究大学での学部教育の空洞化によって，現実的に失われているものがこの二つである。それをすべての学生に再び与えることは無理難題であるとしても，ごく一部の優秀な学生たちに「特権」として与えよう，それも学生たちがメリットと感じられる形態で，というのがいずれものキャンパスで進行中のオナープログラムの神髄である。Individuality個別性の高い教員との接触によって学生に個人的な幸福感を与え，Creative Individuality創造力を養うカリキュラムを提供することで，社会をリードするような創造力の高い人間が養われると信じている。UCアーバイン校のオナープログラム

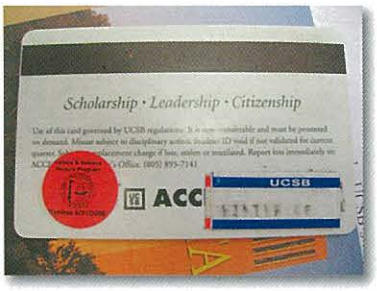
アーバイン校のMcWilliams教授の研究室（Physics and Astronomy学部）にて。（下図）オナー学生として教授の研究を行っている学部生（右）と指導するMcWilliams教授（左）。（上図）良い結果を出し、ご満悦な様子の学部生。McWilliams教授はアーバイン校でのオナーズプログラムの創始者（1988年）。キャンパスレベルのプログラムを展開し、自分が所属しない学部のオナーズプログラムをとる学生も多数存在する。

創設者であるRoger McWilliams物理学科教授（写真参照）の研究室で会ったオナー学生の輝く瞳が忘れられない（写真参照）。彼は教授の研究室に自分専用の実験ベンチを与えられ，嬉々として実験にいそしみ教授とのディスカッションを楽しんでいる。このような体験がいかに大きな影響をオナー学生に学部時代から与えるのか，火を見るよりも明らかである。

オナー学生にとってのメリットは？

オナー学生にとってのメリットを具体的に述べよう。オナー学生として承認されると次のような「特権」～メリットを大学から正式に与えられる。

- Certificate for Honor Student　オナー学生としての証明証
- Direct contact with professors　教員との個別的なコンタクトの権利
- Better recommendation letters　コンタクトのある教員からの非常に良い推薦書
- "LIFE ON CAMPUS"　キャンパス内の学生寮への優先的な権利
- Community of honor students　オナー学生のコミュニティーへ参加
- Prior registration　通常の学生よりも先んじての履修科目登録
- Access to Study Center　オナー学生だけがアクセスできるセンター
- Special lounges only for honor students　オナー学生専用の学生スペース
- Academic Advisor　履修上の相談にのる教員を配置
- Invitation to special seminars　オナー学生だけが招待される特別なセミナー
- Eligibility to Special Projects　プロジェクトへの申請の権利
- Others　その他



サンタバーバラ校にてオナーズ学生がもつ学生証。左下の赤丸のシールがオナーズ学生としての証。

成績優秀でオナー学生として選ばれると学生証に特別なステッカーが貼付される（写真参照）。これを見せると学内で制限のある建物，ファシリティーに入ることが出来る。オナー学生は教員との個別的なコンタクトが許されるという特権を持つ。それによって学生は（1）教員が名前を顔を覚えてくれる（2）必要が生じたときにに非常によい推薦状を書いてもらえる（3）従って総合的に将来の成功が保証される，という可能性を手に入れる。学生寮へ優先的に居住を許されることで，“Life on campus”が成立する。Life on campusは図書館，食堂などキャンパス内のさまざまなファシリティーの利用が他の学生よりも効率的に可能になる。重要なのはオナー学生たちで作る一種のエリートコミュニティである。コミュニティ内では上級生からの学生間の指導，同学年間の情報交換が主に電子メールを使って行われている。電子メールのアドレスはオナー学生相互だけに公開されている。コミュニティーはエリート集団への帰属意識が良い循環を作って

部屋の中にいたオナー学生。この部屋で様々な刺激を受け、有意義な学生生活を送っている。

アーバイン校のオナー学生のみが利用できる部屋。中にはコンピュータ、書物等が備わった広いスペースがある。

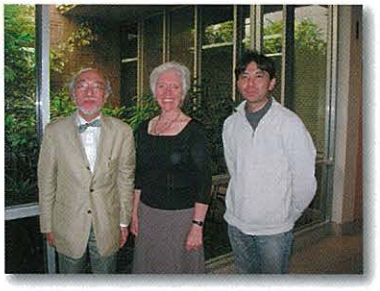
勉学の意欲を高める。オナー学生だけが入室を許可されたラウンジがある（写真参照；UCアーバイン校）。中には大学からの様々な情報，海外の情報，インターネットへのアクセスのためのファシリティーがあり，広いスペースの中にゆったりとしたデスク配置，ソファなどがオナー学生たちの「選民意識」を刺激する装置として上手に機能している印象を持った。訪問時にラウンジにいた学生は二人ともアジア系の女性であった。堪能な英語，極めて高いコミュニケーション能力を身につけて，日本からの訪問者である我々教員にも物怖じせずにのびのびとした感性を現していた。オナー学生は大学が主催する高度な内容のセミナーに招待される。セミナーはオナー学生のためだけに企画されたものもあれば，大学院生，教員むけに企画されたものにも招待される。そこでアカデミックな雰囲気に十分ひたることができる。オナー学生だけが申請可能な特別な予算申請も準備されている（上記参照）。

ケーススタディ（1）

サンタバーバラ校のキャンパス内のカフェにて。左よりオナー学生のDustin May氏、熊野。May氏は最上級生で、下級生の面倒を見るアドバイザーも兼ねる。オナー学生としての誇りを持つ。

以上の内容を具体的に語ってくれたのが我々がインタビューしたDustin May氏である（写真参照）。UCサンタバーバラ校のPolitical Science専攻の3年生である。我々とオナープログラム管理等でプログラム責任者に紹介されてすぐに，我々をキャンパス内にある日のさんさんと降り注ぐカフェへ誘ってくれた。そこでインタビューを行うことになった。May氏は実にのびのびとした人格で，オナー学生としての自尊心を忌憚なく表現し，我々の質問に答えてくれた。上記にある「特別プロジェクト」の枠を使って，近い将来モスクワに研修に行く期待を目を輝かしながら語ってくれた。May氏のインタビューを通じて感じたことは，オナープログラムに設えられた学生に意欲を与える仕組みは，単独であれば特別に価値の高いものでないが，仕組みの中にあるプログラムが実に上手に互いに作用し合って，全体としてオナー学生の意欲を高めていく全体装置として機能し，高度なものがデザインされているということである。これはともすれば散逸的になりがちな日本の大学での教育プログラムとの好対照をなしている。全体装置の成立を何が可能にしているのかということは，我々が各キャンパスでのインタビューに際して考え始めることになった重要な問いであるが，いかに書くことにその答えの一部が見える。

教員にとってのオナープログラムの意義



サンタバーバラ校Letters and Science建物内にて。左より、荻原、Mary Nisbet教養学部副学科長、熊野。彼女はは、現在は事務員であるが、元は大学の教壇で教えていた。Letters and Scienceのオナーズプログラムに参加する教員は皆ボランティアで、彼女はその精神について話してくれた。

オナープログラムの現実をオナー学生の側にたって述べてきたが，オナープログラムが教員にとってどのように理解されているのか，オナープログラムが教員にとってどのようにやりがいのある教育プログラムであるのかについて述べたい。上述のようにオナープログラムは巨大化したマスプロ教育大学が，さらに研究大学として発展していくときに抱え込んだ問題を克服する教育装置として考案されたものであるが，メリットは学生の立場からすると明確なようにデザインされている。しかし学生にとってのメリットを与えるというだけでは，巨大研究指向大学（阪大もその一つであろう）に所属する教員が教育と研究上のミッションを同時に抱えながら，それ以上の努力をオナープログラムに注ぎ込むとは到底思えなかった。我々がそのような疑問を漠然と感じていたときにUCサンタバーバラ校のオナープログラムの責任者であるMary Nisbet教養学部副学科長（写真参照）が明確な答えを与えてくれた。オナープログラムは教員にとってもやりがいのある，手応えのある教育プログラムなのである。以下のポイントはNisbet副学科長が語ってくれたことである。

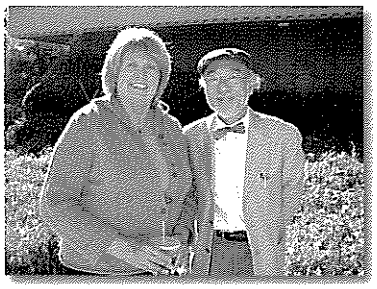
- Can avoid too general topics　あまりにも普通すぎる講義内容でなく，多少専門的だったり，自分の話したい内容を話すことができる
- Can meet with brighter students　優秀な学生にクラスで出会うことができる
- Can know students better　一人一人の学生をより良

く知ることが出来る

- Can get research outputs by undergrads without salary! オナー学生の成果は院生へなら支払うべき給料なしに得ることができる
- Can share a feeling of voluntariness　押し付けられたものでなく自分が望んで参加しているという教育の自発性を自分の意志の中に確認できる

100人から500人，場合によっては1000人もの大教室での講義は，教員にとっても精神的，肉体的に大きな負担である。少人数のオナープログラムの科目では，大人数の講義と違ってよりフォーカスの合ったトピックを提供できる。自分の専門の内容に近いトピック，または自分が興味を持っている分野の内容を話すことが出来る。またオナープログラムの講義では，トップ5－10%の優秀な学生に出会うことが出来る。これは教員として知的な喜びを得る良いチャンスであろう。少人数のクラスでは学生の顔と名前が一致する。仕事だからといってアノニマス無名の人たちに対して講義することの辛さに比べて，少人数のクラスで学生一人一人を人として知ることが出来る機会を与えられるのは教員としての喜びにつながることは想像に難くない。こういった講義室での報われた気持ちに加え，オナープログラムは教員にとって研究上の発展につながる機会を与えてくれる。研究上の成果は通常大学院生レベルにならないと得られないものであるが，優秀な学生集団であるオナー学生が本気になって研究室のなかで研究活動に参加してくれることで，上述の“Publication”に加えて研究上の成果があがることがある。院生であれば給料を自分の科学研究助成費から捻出しなければならないが，オナー学生には給料を教員が支払う必要はない。成果を得る確率がどれほどのことか，という議論ではなく，オナープログラムにこういった可能性を内在していることによって教員への動機づけが成功している。実際に，前述のアーバイン校のRogerは，立ち上げ期にオナープログラムを広く教員に受け入れてもらうために，この動機づけを利用し成功を収めた。またオナープログラムへの参画は訪問したカリフォルニア大学のなかではUCリバーサイド校を除いてすべて未報酬。オナー学生の面倒を見ても，オナープログラムの講義を担当しても給料が増える訳ではない。それでもそこに参画している自分の動機を考えたときに，多くのオナー担当教員と同じように，自発的な気持ちからオナープログラムに時間を使っているある種の喜びを教員たちが見いだす。その自発性と潔さがアメリカ社会を背景として実に高度に機能している。

オナー職員のパワー



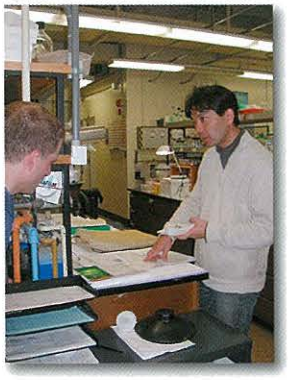
サンタバーバラ校にて。左より、Fletcher氏（Honors Program Coordinator）、荻原。

オナープログラムを動かしている教員と事務職員の熱意と知性には圧倒された。Regina Fletcher氏はUCサンタバーバラ校のオナープログラムのコーディネータである。彼女をはじめとしてオナープログラムのオフィスでは実に生き生きとした人たちが忙しそうに働いている。高度な能力を身につけた集団であり，かなりの割合で学位Ph.D.を持っている人たちである。そういった人たちをオナープログラムに集めることが出来ているために，オナープログラムが成功しているのであるが，秘訣は非常に単純明快である。オナープログラム（に限らないが）で働く，特に事務職員は非常な高給取りである。明確な数字は把握していないが，教授と同額の年収がある。このように述べると上述の自発性voluntarinessと相容れない現状と考えられるかもしれないが，人間はそう簡単な存在ではない。清貧という日本の美とは異なったプラグマティズムがオナープログラムをドライブしているのを垣間みた。

オナープログラムはまたそれをデザインし運用していく教員にとってももう一つのキャリアになりうる。教員は本来，阪大でもそうであるように研究者，教育者として雇用されているが，今回のオナープログラム調査旅行で出会った教員の中には，非常に複雑な決断のもとにオナープログラム企画側への参画をしている人がいた。すべての人とこういったことを詳らかに話し合った訳でないが，本来研究者である教員が，自分の勤務時間のほぼすべてを使ってオナープログラムの運営にあずかっている。当然のことながらそういった人間は高学歴であり学位を持っているクオリファイされた人々が積極的にオナープログラム運営に専任職員として配置されていることを知って，アメリカの大学が持つ大学に対するイメージ，使命感の懐の深さを感じた。研究に没頭する教員が片手間に動かすことが出来る教育プログラムではないかもしれない。

ケーススタディ（2）

オナープログラムの実態を綴ってきたが，オナープログラムを遠景として観察したときにどのような意味が浮かび上がってくるのか。それを知りたくて二人のアメリカ人をインタビューした。二人とも学部学生ではなく，オナープログラムと関わりつつも大学，大学院を卒業後に現在の職に就いている。一人はKourakis博士であり，もう一人はSundberg博士である（それぞれ写真参照）。Kourakis博士は熊野の知人，Sundberg博士は荻原の数十年来の友人である。この二人のオナープログラムとの関わり合いとその後のキャリアトラックの好対照を，以下に述べることによってオナープログラムの意味を別な角度から浮かび上がらせたい。



サンタバーバラ校のある研究室内にて。左より、Kourakis博士（シカゴ大のオナー学生で、現在は発生生物学を専攻するポスドク）、熊野。オナーズ学生になったおかげで、現在研究をやっていると話す。

Kourakis博士はシカゴ大学の卒業生であり，現在はUCサンタバーバラ校の生物系の研究室でポスドクとして働いている。彼はシカゴ大学時代にオナー学生であった。シカゴ大学のオナープログラムを履修して，学部時代に研究経験を持った。Kourakis博士に尋ねてみた。もしもシカゴ大学時代にオナー学生として研究経験を持っていなかったとしたら，今はどんな職業に就いているだろうか？彼の回答は明快である。もしもオナー経験をしなかったら，今頃はビジネス界で働いていてたんまり金を稼いでいるだろう，こんなところでポスドクとして研究人生を歩んではいないだろう，とのことである。学部時代での研究経験が，アメリカ人にありがちが実利的な金銭感覚をも捨てさせて研究人生を選び取ったKourakis博士の今を生み出している。一方のSundberg博士はKourakis博士とは実にコントラストの強い人生を歩んだ。Sundberg博士はUCバークレイ校物理学科（学部）・生物物理専攻（大学院）の卒業生である。大学院卒業後にポスドクとして生命系大学で働いたときに荻原と知り合った。数年間のポスドク期間を経て，その後，バイオ系ベンチャービジネス業界に入っていく。そこで大きな成功を納めて，現在は大企業の生物部門のコンサルタント業をしている。仕事はアメリカ国内に限らず，カナダ，ヨーロッパ，ロシアにまで拡大してる。Kourakis博士への質問と同様にSundberg博士に尋ねてみた。今の彼のパワーの源を作ったのは何なのか？彼の答えも同じく明快である。彼はUCバークレイ校の大学時代（物理）にオナープログラムの存在は知っていたがあえてそこに参加しなかった。理由は大学院時代に物理から生物物理へ専攻を変えることで明快になる。大学院時代には物理学以外にも細胞生物学をはじめとして生物系，化学系の講義を多く履修した。学部時代からの一環した思いは物理学から生物学に関連した分野を広く学びたかった。Sundberg博士は自分の今の成功がこのように広い分野を学生時代に学んだことがもたらしていると思っている。彼の考え方では，オナープログラムとはある特定の専門分野に学生をフォーカスさせるには良いが，一方で逆の希望を持った学生には，如何に彼・彼女が優秀であったとしても適切なものではないとSundberg博士は考える。

サンフランシスコ市内のあるレストランにて。左より、荻原、Sundberg博士（バークレー校に行くもオナーズプログラムはとらず）、Diana Sundberg氏（Sundberg博士の奥様）。博士は専門性の高いオナーズプログラムを嫌い、敢えて幅広い様々な分野の授業を取り、現在の仕事に生かす。

Kourakis博士とSundberg博士の教育とその後のキャリアを考える上でオナープログラムがどのように作用していたのだろうか？Sundberg博士がオナー学生でなくむしろ広い分野を学んだという経験が現在の彼のビジネス上の成功につながっている。彼のジビネスは実にInterdisciplinaryであり，物理学でもなければ生物学でもない基礎の上に成り立っている。一方のKourakis博士はオナー学生としての経験が現在の研究者としてのキャリアのトリガーとなっていることは明白である。

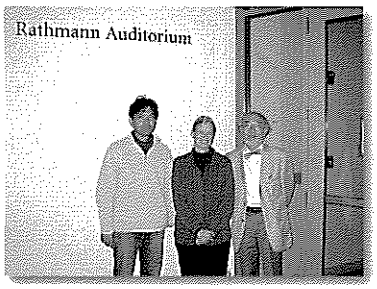
日本の大学への教訓

カリフォルニア大学のオナープログラム調査を終えて，帰国便のなかでひたすら考えたのは日本の大学への教訓である。カリフォルニア大学のオナープログラムをそっくりそのまま日本に「輸入」出来るのか，出来ないとすればその理由は，出来ないとすればどのような日本モデルを作り出さなければならないのか。

オナープログラムはアメリカ文化，アメリカの伝統，アメリカ人の思想とまるで組み木細工のように実に精緻

出会った偉大な人。アーバイン校のキャンパス内にて。左より、荻原、McWilliams教授（前述）、熊野。

に組み合わされデザインされ運用され，そして成功している。ボランディア精神がオナープログラムを支えている。オナープログラムは学生の自発的な気持ちを引き出すよう実に戦略的にデザインされている。オナープログラムの中枢にはキーパーソンがいる。教員と事務職員のコミットメントとパワー。UCIのRoger McWilliams教授，UCSBのKathy Foltz准教授, Mary Nisbet副学科長の輝く誇りに満ちた表情は忘れがたく，同じ大学というシステムの中で働く人間として，このように充実した豊かな人生を歩んでいる人間を目撃して感動し刺激を受け，そしてみずからの誇りを確認した。オナープログラム教員のボランティア精神と学生の自発性はそれぞれの人生に於ける意味付けこそ違い，長い時間のなかでは同じ概念を意味している。オナープログラムはそれを再生産するシステムを内包することで，巨大で力強いエンジンを積んだスポーツカーのように息切れせずに長距離を走り続けることが出来る。



出会った偉大な人。サンタバーバラ校のキャンパス内にて。左より、熊野、Foltz准教授、荻原。Foltz准教授はLetters and Scienceのオナーズプログラムに参加するのと同時に、Biology学部独自のCollege of Creative Studies (CCS)プログラムにも参加。CCSは、将来的に新しい知を創造する人材を育てることに特化したコースで、他の専攻（例えば音楽）からの学生も受け入れる。

〈この報告は，文部科学省の委託業務H19年度「理数学生応援プロジェクト『理数オナープログラムー飛躍知の苗床育成を目指してー』」の研究成果の一部である.〉

（おぎはら　さとし・くまの　がく　理学研究科）